

オリエンテーリング・ウェアって、なんでトリムっていうの？ その答えがここにある。

### オリエンテーリング標準ウェア

新歓で夏まではトリム姿を見せないようにしよう、という取り決めていた大学があると聞いて、愕然としたことがある。どんなスポーツにも独自のウェアがあり、それが愛好者のアイデンティティーにもなっている。そのウェアを非愛好者に見せられないとは。

まあ、上着はともかく、あのパジャマのようなトリムテックスのズボン、確かになんとかならないかと思う。某アウトドアメーカーの部長さんから、「あのウェアなんかかなりませんかね」と言われた。北欧のエリートたちも、そのデザインはお気に召さないらしく、独自のブランドで、「かっこいい」ウェアを作ろうとする動きがあるのが、ほほえましい。大学生の「トリム禁止令」はそのような感情の素直な発露なのだろう。

そうは言っても、大会会場で見れば、圧倒的にトリム全盛である。下はタイツという選択肢もあるが、上に関してはトリム以外の選択肢は事実上ない。それくらい、オリエンテーリング＝トリムなのである。

### なぜ「トリム」？

ところで、あなたはトリムという言葉に疑問を抱いたことはないだろうか？ オリエンテーリングウェアのことを指してトリムというが、サロンパス同様、この言葉は元々は固有名詞であり、唯一日本のみで普通名詞化しているのだ。だから、トリムは性格に言えば、オー・スーツと言うべきだろう。

トリムとはトリムテックスの略。ノルウェーのリレサン（ちなみにこの町は、一世を風靡した哲学ファンタジー「ソフィーの世界」にも登場する、ノルウェー南部の港町である）に本社を持つスポーツウェアメーカーの名称である。日本でも海外でも0スーツ市場を寡占していた当時、どんなに大きな会社だろうと行ってみたら、人のよさ

そうな年輩のおじさんが、近郷の主婦を雇って縫製している、ほとんど家内制手工業的な製作所であった。

### 日本とトリムの歴史

トリムテックス社のウェアが0スーツの代名詞として日本で扱われるようになった背景は1970年代にまでさかのぼる。当時は、現在のように海外の用品を簡単に輸入できなかった。そのため、まだ少数派であった海外遠征組がオーリンゲンなどの大会で買ったり、それをお土産にもらった人々が誇らしげに着ていたのが、トリムテックス社の0スーツであった。

当時のボトムは膝丈が一般的で、ひざ下はすねの部分が補強されたレガースを使うのが一般的だった。なかにはそのスタイルに少しでも似せようと、ジャージを膝丈に切る涙ぐましい努力をしているオリエンティアもいた。

当時は、迷ったら「トリムを着ている人についていけばよい」「トリムを着ている人に道を聞け」と、大学の新人への指導がなされたほどだ。トリムを着ていることは、オリエンティアとして一人前の証であったわけだ。今では散々なトリムだが、多くのオリエンティアに憧れられた時代もあったのだ。

1981年、日本が4度目の世界選手権に出場した時、せめて0スーツだけでも揃えようと、トリムテックス社に特注デザインでウェアを作った。このころから、トリムテックス社のウェアは少しずつ大衆化していった。勢いをかって、ナショナルチームはその後トリムテックスのチームデザインウェアを仲介するようになった。まだ円も高く、また多くの人々が海外取引のノウハウも無かった時代なので、トリムテックスの輸入量は、飛躍的に増え、チームの資金にもなった。大学の新人ですら、夏過ぎるとトリムを作る。それによって、もはや「トリムを着た人の後についていけばいい」時代は終わった。

### かっこいいウェアを目指して

トリムテックス社が、日本の大学生が「新人には見せるな」という指導を知っているとは思えないが、遅ればせ

ながらデザイン革新には乗り出している。新しく作られたデザインでは、胸と背中が汗でべちょべちょしないことで有名なクールマックスを取り入れている。

多くのスポーツが、テレビ受けを狙ってウェアにも改善の手を入れる今（バレーなどは最たるものだ。ただのセクハラおやじのアイデアという話もあるが）、0スーツも、そろそろ進化のしどきであろう。



日本チームの初代チームウェア。  
トリムテックス社製である  
(81年世界選手権にて)

(村越 真)